

エクリチュールへの挑戦

『教師・わが半生の記録―表現活動の軌跡―』を読んで

兼本 千絵

木坂基先生著書の『教師・わが半生の記録―表現活動の軌跡―』を読んだ時まず私の頭に浮かんだのは、先生のご専門でもあり、三年生の後期に講義でも取り上げられたエクリチュール（書記言語）という一つの媒体について、先生は新たな挑戦を試みているようだ、ということでした。

内容は木坂先生の四五年にわたる教師生活の活動の記録であります。活動をこのようにまず章立てで、さらに一つ一つでエクリチュールを媒体とした記録になっているものを一冊の本にまとめ、そうすることで木坂先生という一人の人間の半生を綴る大きな一つのものにするという点から、この本はエクリチュールへの一種の挑戦をしているようだ、そう思いました。

この本は深く考えようとするほど、たいへん興味深

い構成をしています。ここに載せられているものはもともと一つ一つが記録としてのエクリチュールの役割をきちんと果たしているものでした。ですがそれらをまとめることで、一つのまとまった、新たな記録物ができています。

そしてなにより一番興味深いと思つたことは、それを構築する一つ一つの記録は、文集や部活紙、機関紙に寄せた文章であったり、祝意を述べた文であったり、誰かを紹介した時の文であったり、挨拶文であったり、手紙であったり、とにかく様々な形式で綴られているものであるということでした。

それらは様々な形式で綴られています。すべて同じく「記録」という行為を「エクリチュール」という媒介を通して行なっているものなのです。

エクリチュールには本当に様々なものが含まれるという事実を、木坂先生の四五年もの歳月をかけて、本書は実践的

にあらわしています。これはエクリチュールを媒介とした記録をコツコツと長年にわたってちゃんと残してきた木坂先生の功績であり、さらに教師としての半生でたくさんを経験してこそ叶ったものでしょう。つまり、本書は木坂先生でなければできなかった本とも言えるわけです。

さらに、テキストという単位で日本語学を見ると、言語単位は本書の中でこのように記されています。

「テキスト＝記号論の「書く」という実践が残す痕跡から成る複合的な書き物」(ロラン・バルト著『小説の記号学』花輪光 訳 みすず書房) の定義に近い概念を持つ。

書かれた表現(言述・言説)あるいは、書記行動の痕跡であるといわれている。文のレベルを超えた言語単位として、段落、作品、文章などを包括的にテキストと呼ぶこともある。また、テキストは、本来、書き言葉側から見られる概念であるが、最近では、音声言語にも通じる単位として扱われることもある。本書も記録および記録活動の成果をテキスト、ないしは記録テキストと呼んでおきたい。」(二二頁)

ロラン・バルト曰く、テキストとは「複合的な書き物」であ

る」ということになっています。そしてそれは段落も作品も文章もすべて包括的に、文のレベルを超えてテキストと呼ばれることがあり、さらには音声言語までもが、このテキストに含まれるということになるのです。

音声言語がテキストに含まれる場合は、ドラフトDRAFT(下書き・草稿)やサブテキスト(控え)の存在が無視できないと思います。以前私たちは講義の中で、

「音声言語がテキストとなるためには、必ずドラフトが必要ではないでしょうか。つまり、逆にいえば、ドラフトがなければ音声言語はテキストには成り得ないのではないかと思うのですが、この考え方は正しいのでしょうか？」

というような内容の質問をさせていただきました。とはいつても、その日は残り時間もわずかで、私達がうまく質問をまとめて表現できなかったままに講義が終わってしまつたのですが、今改めて考えるとそれは必ずしもそうではなかつたと思います。

例えば、演劇の台本はドラフトとは違いますが、あれは音声言語のために書かれたテキストです。演劇におけるセリフというものは、音声言語であると同時に、台本においてはテキストであるからです。そしてそれはとても文学性の高いテキストです。

しかし、あの日の授業で、私達がうまく質問を先生にお伝えできなかったという自分達の言語表現の不熟さを思い返すと、ドラフトの大切さはよく分かります。音声言語においても、その発信しようとする言語をより適切に磨き上げることは重要なことなのです。そしてその磨き上げる手段として、紙とペンでの下書きという、エクリチュールによる行為が行なわれ、そうして生れるのが音声言語としてのテキストではないかと思いました。そのプロセスを考えると、言語表現とはとても難解なシステムの上に成り立っているものなのだと思いました。そしてまた同時に、言語を用いる表現活動とは人間のもつ最高に優れた能力であるとも思いました。このように、人間の素晴らしさは、学問を学んでいるときにふいに気づかされるのがよくあるので、その分サブライズが混じったように受ける感動も多いものです。

ところで、テキストといえればそれはつまりエクリチュールとイコールで結びつけてよいものではないかと私は思っていました。しかし書記言語（エクリチュール）に対して音声言語があると同時に、音声言語はテキストに含まれ、その時点でそれは書記言語化された音声言語、または音声言語化された書記言語となつていきます。テキスト・音声言語・書記言語の三つは時に重なり合い、時に対立し合いながら、まる

で複雑なトライアングルを描いているような印象を抱かされました。

しかし記録という行為においてすでに様々な媒体が溢れている現代、エクリチュールを用いることの利点とは一体何なのでしょう。木坂先生は本書の中で、以下のように記しています。

「記録という言語活動は、人間の表現活動としては地味な行動である。しかし、表現媒体としてのエクリチュール（書記言語）は、表現性の自由さや豊かさという点では、どの媒体にも劣らないものをもっている。」（二七頁）

これはエクリチュールの優位性を見事に言い当てたものだと思います。エクリチュールによる表現は無限の広がりをもっていて、だからこそ私達日本文学・語学を学ぶものにとつては解釈をする上で大いなる可能性として目の前に広がっていると言えるのです。そしてそのエクリチュールによって本書に様々な形式をとって載せられている記録行為は、木坂先生が本書の中で、

「記録行為は、筆者主体の表現活動の蓄積である記録

テキストを生成する。したがって、書くという営みは、人間の思考活動を支える重大な活動である。筆者は、この記録活動を通じて、教師という与えられた仕事を実践してきた。」(二頁)

と、記しているように、実用性ももっているたいへん価値のある行為です。

実は、個人的なことを申しますが、私の卒業論文にも、このエクリチュールによる記録行為という活動が題材の上で大きく関わっています。

私の卒業論文は太宰治の一般に安定期といわれる時期に書かれた「女生徒」という短編小説の研究です。そして「女生徒」は太宰作品の愛読者であった有明淑(子)という当時十九歳であつた少女から送られてきた日記を元に書かれたものです。なので、私はその元となっている『有明淑の日記』と太宰が作り上げた文学作品である「女生徒」との比較に挑戦したいと思っています。やってみると、これはとても興味深い作業でした。まず「女生徒」の研究をするつもりで取りかかったものですが、いざ『有明淑の日記』との比較を行なってみると、その日記だけで見てもたいへんおもしろく、読み解く要素をもっていました。日記という記録テキスト

はもともと人に読ませようとして書いたものではないはずですが、改めて日記というジャンルから色々な作品を見てみると、「女生徒」と同時期に日本中の若者たちから読まれていた『三太郎の日記』なども、己の心情をつらつらと、徒然ながらも心からの言葉で吐露していて、たいへん興味深いものであることを感じました。今回木坂先生の講義を受けて、『有明淑の日記』ももともととは記録テキストであつたはずなのに、それが文学へとかたちを変えているこの変容にも注目するきっかけができました。

木坂先生の四五年にわたる教師活動の記録である本書は、『有明淑の日記』のように日記という決まつた形式による記録テキストではなく、様々な形式で書かれた記録のテキストたちの集大成であります。その一つ一つに込められた先生の思考はどれもとても深い心の声です。記録とは、時に文学以上に書き手の心情を表し、読者に訴えるものがあるように感じます。そこに描かれるものは、時にその時々思いや思想であつたり、トラウマであつたり、日常の何気ないことであつたりするわけですが、それらすべて、書くという行為で括られるものたちはそれだけで人間の尊い営みであり、できた記録テキストもそれだけで読者に何かを訴えうる文学性をもっているものだと感じました。